

日税メールステーション特別号

～海外ビジネス情報～

あるビジネスマンの「アジア出張記。」

最終編

今回は、予定していた全 6 回の最終回です。

Global Knowledge Asia シンガポール受付



前回までで、カンボジア、シンガポール、マレーシア、インドの 4 か国について出張時の出来事や感じたことを書いてまいりました。

「出張記」という題名の割に、実際には「旅行記」に近い雑記となってしまったのは否めませんが、内容が当社の戦略に関係し、特に経営統合という神経質な時期のことであった点を何卒ご理解ください。

グローバル化が叫ばれ続け、日本(人)の特異性やアジア各国の勢いが強調されますが、この一連の出張で私自身は以下のように感じました。

■グローバル化

グローバル化というキーワードの下、海外に出てビジネス開拓をできる人材が重要と言われますが、国内に置き換えるとどうでしょうか。

例えば、全く会社の地盤がない他の地域に行ったとして、ビジネスを進めることがどれだけできるでしょうか。国内のため言葉は通じますし、国民性自体は理解しています。どれだけ相手を巻き込み、共感させ、決定し、一緒に動き、結果につなげるか、ということで、これは国の内外を問わずのことです。

一口に「グローバル化」と言う前に、ビジネス力なのか、小さな起業家力なのか、自力でビジネスを押し進める力はどれだけあるか、という事をまず考えてみる必要があります。

それでもグローバル化と言った場合に、世界標準があるわけではなく、それこそ国によって特異性が必ずあります。最後にはローカル化が必要になってきます。

つい先頃、出張で某国に赴き、日系企業現地法人のトップの方数人とお会いする機会を得ることができました。訪問したどの会社も現地での実績をすでにお持ちで、これから本格化しようという弊社とは異なる段階にありました。

お話しして分かったのは、

- ・ 日本からの視点に偏ることなくその地での視点で物事をお考えである
- ・ 人事制度に苦慮されている
- ・ 現地の人に重要なポジションを任せ運営している

ということです。

想像以上に「日本が」という考えが少なく、いかにその地に合った方法で運営していくか、に御苦慮されています。私が聞くことができた範囲内ではありますが、実際にグローバル化を果たしている企業に共通していることとして改めて知ったことが、その出張での大きな収穫でした。

■日本

周囲を海に囲まれ、言語も基本的に一つ、民族の流入がなく、他国の侵略を受けたこともない、という国は他にはないでしょう。

相応の人口があり、自国内での経済が成り立ち、高度な技術を築いてここまできたのが我が国です。特異な国ですが、実際に居心地は極めて良いです。近隣諸国との衝突はありますが、アジア全体で見ると日本を好意的に見ている国が多数です。

日本品質は今もなお他国の尊敬を集め、日本食や漫画・アニメは各国でブームです。“おもてなし”の心が、海外の外食産業などのサービス業で、従業員に身につけさせたいものとしてとりあげられたりもしています。日本は誇るべきものをたくさん持っており、一目置かれています。

とは言え、多国と交わって競争・“共走”せざるをえない時期に来ています。各国の街を実際に見、現地の人と接すると、勢いやスケールの大きさなどを非常に強く感じ、自国の優位性を感じにくくなってしまっているのも事実です。元気がないと言って日本に見切りをつけるか、いや何の何のと奮闘するのか、色々なとらえ方があるでしょう。危機感を持った日本が「やる時はやる」を実践するとどうなるか、私には楽しみに思えます。



■ASEAN 各国

このコラムでは ASEAN 諸国(とインド)を取り上げました。実際に各国に降り立ち、その活気を目のあたりにすると、勢いのすごさに圧倒されます。子供のころに持っていた、大変失礼ながら、貧しい国々というイメージは払拭されました。

私は『アジアを“見てしまった”』という表現をすることがあるのですが、この面白さを知ってしまったことで、今後どのような形でも関与していきたいと強く思うようになりました。各国で接した人々が魅力的であったという幸運も多分にあるでしょう。

しかし、気温だけでない各国の熱気に加え、何度も書いてきている“勢い”や、現地の時に激しく、時にゆるくという高低差が、すでに落ち着きを持っている日本と比較すると大きな刺激となるのです。

しかし、日本は遠い。現地に飛んで直接話をするには、飛行機で6～8時間かかります。シンガポールからならば1時間飛ばせば近隣諸国に着きますが、東京から1時間ではまだ国内です。大企業のアジアパシフィック地域のヘッドクォーターが香港やシンガポールに置かれるのも無理はないと思います。

そして日本は寒い。夏場は良いのですが、冬場は日本と現地の気温差が30度あり、着ていくものに困るうえ、何より体調管理に必要以上に気を使います。花粉が飛び交うまだ寒いこの時期に日本にいと、向こうに飛んでいきたくくなります。



■英語

日本人は英語が使えるのでしょうか？中・高・大と12年も学習をして、全く使えないということは、普通に考えたらありえません。少なくとも読むことができる人は多く、辞書を引きながらであれば、まがりなりにも作文はできるでしょう。また、自分の言いたいことが口をついては出てこないけれども、相手の言っていることはある程度理解できるという人は多いでしょう。

世界各国で英語教育のサービスを提供している Education First 社による各国の英語能力 (EF 英語能力指数: EF EPI) の調査結果によると、日本人は High/Moderate/Low の三段階のうち真中の Moderate に位置しています。「Low ではないのか」と思う方も大勢いらっしゃるでしょう。この調査では、英語能力として実は「読み書き」が考慮されていて、会話以外も含めるならば日本人は結構英語が使えるということが表れています。

話すのが苦手なことの大きな要因は、正確性(しかも完璧を求める)にこだわりすぎ、間違ったら恥ずかしいという生来の奥ゆかしさ(!)のためで、実際には「話さない」ということが多分にあるのではないのでしょうか。ある国では突っ込みどころのある英語を話したり書いたりする人に会いました。また、耳で覚えた英語で堂々と会話はすれども書くのはダメ、という人もいました。それでも意思表示はしっかりとしているのです。

つまるところ、どれだけ自分から話しかけるか、ということで、それによってさらに話せるようになる、という相乗効果が大きいのではないかと考えています。日本ではヒヤリングの勉強は流行りますが、聴く勉強だけでは不十分で、口に出すことが重要と実感します。

今あらためて思うに、英語が少し上達したなと感じたのは、会議等で説明しなければならなかった時、

ホテルに忘れ物をして電話でやりとりした時など、他人を頼れず自分で何とかしなければならなかった時です。その程度の場合だったから何とかあったというのが正しい見方でしょうが、自分で何とか伝えなければならぬ場、これが必要です。そして、今自分が持っている語学力をいかに有効に使うか、これも現実として忘れてはならないことです。

このコラムを始めて半年が経ちました。その間、また別の国に行き、あるいは同じ国を複数回訪れ、グループ内の連携、他国進出準備など少しずつ進めています。弊社の機密事項に關与することが多くご披露できないのが大変残念なのですが、業務からある程度離れた内容であればいずれコラム化も許されるでしょう。アジアの魅力を知ってしまった私には、読み手に面白いかどうかは別としても、誰かにお伝えしたいことがまだまだあります。

またの機会に、番外編でもお出しできることを期待しつつひとまず筆を置きます。もしご感想やリクエストなどがございましたらご連絡いただければ幸いです。

拙筆にもかかわらず、これまでお付き合いいただき、大変ありがとうございました。

グローバル ナレッジ ネットワーク株式会社 柳 恵太

〈番外編〉

中国の旧正月で行う儀式です。みんなで箸でかきまぜてから食べるのですが、高く箸を持ち上げるほど良い事があるとされています。以下の2つの写真は、かきまぜる前とかきまぜた後の様子です。



【執筆者】

柳 恵太（やなぎ けいた）

グローバルナレッジネットワーク株式会社

サービス戦略本部 本部長

ソフトウェアベンダー、メーカーにて主に移動体通信システム開発のエンジニアおよびプロジェクトマネージャを経て、2005年にグローバル ナレッジ ネットワークに入社。新サービス立ち上げや技術者育成カリキュラムの企画・開発・実施、大型プロジェクトのマネジメント等の業務を経て、2011年9月から現職。

現在は、サービス企画、マーケティング、海外展開等を推進する部門を統括。



【グローバルナレッジについて】



Global Knowledge.

グローバルナレッジネットワーク株式会社は、世界約30か国に展開するITとビジネススキルのトレーニングプロバイダーです。国内外で活躍するビジネスパーソンに向けて、ヒューマン・スキルやビジネススキル、オリジナルITトレーニングやITベンダーの認定トレーニングを提供しています。

▽あるビジネスマンの「アジア出張記。」はこちらのサイトでもご覧になれます

<http://blog.globalknowledge.co.jp/asia/>